

オプション教材ザクロ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

4.

5.

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

3.

5.

1 国境を越えて移動する人々にとって、連続性の保証はなによりも強く希求するところとなる。2 なかには、抑圧的な社会体制から逃れることを一つの目的とし、憧れの新しい世界を求めて居を移す者たちもいるが、それでも知己、親戚などのつてを頼り、同国人あるいは同民族コミュニティの中に迎えられることを願う者は多数であろう。3 先にあげたアルジェリアのカビール地方の向仏移民たちが「フランスは初めて踏む土地ではない」と思い込んでいたことは、この連続性の想定であり、もつといえは連続性への願望であろう。4 この連続性の想定でもつことなしには、移動という行動がいくぶんともそのような想定をもつことなしには、移動という行動がそもそも起こりえないだろう、ということはずに述べた。連続性想定の機能的意義は大きい。

5 しかし、こうした連続性の想定の上での移動は、また、移民たちの生活をさまざまに限界づけてしまう。そのもつとも顕著な例は、言語へのかれらの態度である。6 かつてトルコの東部から連鎖移民的にドイツの町々にやってきた移民たちは、「ドイツ語ができなくとも、トルコ人の先住コミュニティに迎えてもらえばなんとかなる」と思い、ドイツ語を学ぶ労もとらずドイツに住み着いた。7 たしかにコミュニティの中で生活しているかぎり大きな不自由はないが、そこから外へと人間関係を広げていくことはほとんどできない。職場の中でのかれらの位置も、トルコ人を同僚とする限られた地位にすぎなくなってしまう。

8 言語に関しては、旧植民地から旧宗主国にやってきた移民の場合に、連続性の幻想がかえって一個の陥穽となるおそれがある。9 たとえばアルジェリアからフランスへの移民には——少なくともこの国のアラビア語化が本格的に始まる以前の六〇年代の来仏者には——「フランス語は使えるから、問題はない」という思い込みがあった。10 だが、かえってその思い込みのため、フランス語を学ぶという動機づけが弱く、夜間の講座に通うなどの労もとらず、そのため来仏後の進歩がはかばかしくない、という問題を生じていた。じつさい、彼らが「フランス語には問題はない」というのは、せいぜい日常会話のそれであって、言語資本としては貧しい。フランス語の読み書きは心もとなく、自分で手紙を書くことはもとより、新聞を読むこと、職場で操作マニュアルを読むことも困難なのである。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

となると、いざ職場で技術革新がおこなわれ、新しい技術システムが導入されるときなど、かれらの読み書きの難しさが、そのまま技術的適応の困難を引き起こし、雇用不安にさらされることになるのである。

連続性の保証が問題を生んでいる別のケースをあげれば、それは、日本への出稼ぎ数が近年増大しているブラジル、ペルー、アルゼンチンなどの出身者の場合であろう。日本語保持率の高い日系二世はまだしも、三世になると、日本語を使える者がきわめて少数となるが、かれらは来日にあたって、旅行業をかねる斡旋業者にすべてを委ねることで、連続性を確保しようとする。ビザの申請から、職の斡旋、来日後の住宅の手配まですべて業者に任せ、来日すると、派遣業者に引き継がれ、ここでも日本語を使わず、ほとんどあらゆる手続きが代行されるのである。当人は、ポルトガル語、スペイン語を使い、本国の文化に従いながらなんとか日本の職業生活の中に位置を得るようになる。日本の社会制度に関する知識も自らの努力で得ようとする者は多くない。当座はそう必要がないと感ずるからである。しかし、その代償は小さくなく、日本社会の中でのかれらの孤立は一部このこと

(宮島 喬『文化と不平等』)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

過去には、二種類のものがあるような気がする。そのひとつは年表に書かれている過去であり、つまり知識として私たちが知っているような過去である。それは、もはや体験することのできない過去といつてもよく、たとえば鎌倉幕府が、いつ、どのような過程をへて成立したというようなものである。

ところが過去には、もうひとつ、現在にまで受け継がれてきたものがある。それは棚田の景色のなかにあるものだったり、村祭りの神楽のなかにあるものや、その地域の方言のなかに隠されているものだったりする。ときには森の景色や地域のさまざまな習慣、農民や職人が用いる技のなかに、過去から受け継がれたものを感じとることもあるだろう。

歴史学と歴史哲学が異なるのは、歴史学が事実として展開した歴史を明らかにしようとするのに対して、歴史哲学は、人間にとって歴史とは何かを課題にしていることである。だから、歴史哲学は人間たちがつくりだしたもつとも古い学問のひとつであった。なぜなら、過去とは一体何なのか、未来とは何なのかを、昔から人々は知りたかったからである。それを知ることによって、自分たちには存在理由があることを人々はみつけた。すなわち、過去をどのように受け継ぎ、どのような未来へと向かう過程に自分たちは存在しているのかを知ることによって、歴史のなかの自分の役割をみつけたし、安心したのである。あるいはそれがみつけないとき、人々は不安のなかに投げ込まれた。

といっても、今日では、歴史哲学は歴史学の一万分の一も議論されてはいない。それは、近代社会に暮らす人々が、過去は受け継ぐものではなく、乗り越えるものだと思える精神の習慣をもっているからであろう。現実への対応だけが課題であり、過去も未来も思慮の彼方にあるというのが、近代社会での暮らし方である。とともにもうひとつの理由として、私たちの社会が、次第に過去を受け継げなくなってきたこともあげられる。

過去から受け継がれてきた景色も、言語も、技や習慣や自然も、ときに大きくつくり変えられ、ときに失われていった。いわば、私たちの暮らす世界から、生きている過去を感じさせる場所や時空が

消えていったのである。

とすると、なぜそれらは消えていったのであろうか。近代社会、とりわけ二十世紀の社会が、過去を乗り越えていくことを善とする、変化のなかに展開したということも理由のひとつだろう。だが、それだけが原因だったのだろうか。私には、その奥にもうひとつの原因があったような気がする。

二十世紀とは、人々が広い世界のなかで生きようとした時代であった。狭い世界で生きることが恥と感ずる時代といつてもよい。だから多くの人々が村や町を捨てて都市に出た。さらに都市を捨てて、世界に出ようとする者もいた。

といつても、最近の歴史社会学が明らかにしているように、近代以前の社会においても、結構人々は共同体のなかに閉じこもっていたわけではなく、広い世界との結びつきをもっていたのである。だが当時の人々にとっては、どれほど広い世界で生きていたとしても、自分の帰る場所は、共同体や自分の技が生かせる世界にあった。

つまり、近代になって変わったのはこのような関係である。近代人たちは自分の帰る等身大の世界を捨てた。それは過去が受け継がれていく世界を捨てることでもあった。

私は、人間には、自分の存在を介して受け継げる歴史の空間的範囲、というものがあるような気がする。だから、その「範囲」であるローカルな世界を克服対象にしたとき、過去を受け継げなくなり、すべてが変わるだけの世界にまきこまれていった。その結果、生きている過去が消え、歴史は単なる過去の出来事、過去の知識になっていった。

二十世紀の社会は、歴史とは何かという感覚自体を、知らないうちに、変化させていたのである。

（内山節『「里」という思想』より）



ここで一つの例をあげる。今かりに、ある文科系の大学生が卒業論文を書く上で、どうしても高校生の頃に習った数学の因数分解を用いなければならぬ必要が生じたとする。ところが、彼は文科系の学問ばかりしてきたために、いつのまにかすっかり数学の因数分解を忘れてしまっている。どうするか。彼はおそらく図書館に直行して調べるか、理科系の友人にたずねてみるか、何らかの手段を講じるに違いない。そして、そのようにちよつとした労をとった彼は、すぐに「ああ、なるほど」とうなずくことができるに違いない。なぜかという

と、彼の頭の中には高校時代に習った因数分解の基礎的な知識が蓄積され眠っているからだ。それゆえ、一度も数学を勉強したことのない人ならば理解するのに長い時間と労力を要するところを、彼は短時間でさほど苦勞せずに理解できるのである。

このように、脳に蓄積され取り出せない状態にされていた知識は、永遠に取り出せないものではなく、ちよつとした手間ときっかけをつくれば、容易に取り出すことができるのだ。人間の脳に「ゆとり」があるからこそ、それが可能なのである。

知恵とは、一つはこのような側面をもったものだと思う。私はこれを「知恵の広さ」と呼ぶことにしている。この「知恵の広さ」は勉強しては忘れ、また勉強しては忘れていくうちに、自然と脳の中につちかわれていくのである。

知恵がつくられる場所である人間の脳は、また、コンピューターなどとは違って、物事を幅をもつてみつめ、考えることができるようにできている。つまり寛容な思考態度をとることが人間にはできるのだ。

例えば、コンピューターに映画を見させても、彼は鑑賞することができない。なぜなら、一つ一つのコマがバラバラな画面に見え、そこにある連続した動きがコンピューターには見えないからだ。ところが人間は、一つのコマを見てイメージをはつきり残し、次のコマへ移るまでのきわめて短い間を無視し、前のコマのイメージを持続させて次のコマのイメージと重ねることができ。これは人間の脳がある時は敏感に働き、ある時は鈍感に働き、また刺激に対する反応の余韻を残すという特性をもっているからだ、ともか

くも、人間はそのような不連続なものから連続したものを読みとる能力をもっているのだ。

人間の脳にあるこの寛容性は、ものを考える上でも発揮される。その一つは連想である。

文章、特に詩とか格言のようなものを読む時、その中の言葉から連想される異なった言葉を、思いつくまま列記しておくとする。列記された言葉のいくつかを組み合わせて新しい文章をつくってみる。こうしたあとで、もう一度、元の文章を読み直すと、意味の理解が深みと新鮮さをもつものだ。連想は、言葉の意味と感じに幅をもたせてみるという脳の寛容性から生まれる。

また連想の習慣は、いくつかの異なるものの間に共通点を読みとる脳の働きにもつながる。数学の簡単な例でいうと、円と三角形の共通点は、平面を内側と外側の二つに分割するという性質である。コの字には、この性質はない。ハの字は、平面を三つに分割する。実際生活でも、議論をまとめる時に、異なった意見の共通点を発見する能力は大変有用である。

このように、人がものを考える時は幅をもった考え方をするものであり、またそれでこそ、思考は発展性をもつて深まっていくのだ。

(広中平祐『生きること学ぶこと』による)



1 経済学の父アダム・スミスはこう述べています。「通常、個人は自分の安全と利得だけを意図している。だが、彼は見えざる手に導かれて、自分の意図しなかった公共の目的を促進することになる」。2 ここでスミスが「見えざる手」と呼んだのは、資本主義を律する市場機構のことです。資本主義社会においては、自己利益の追求こそが社会全体の利益を増進するのだと言っているのです。

3 経済学者の「悪魔」ぶりがもつとも顕著に発揮されるのは、環境問題に関してでしょう。多くの人にとつて、資本主義が前提とする私的所有制こそ諸悪の根源です。環境破壊とは、私的所有制の下での個人や企業の自己利益の追求によつて引き起こされると思っているはずですが。

4 だが、経済学者はそのような常識を逆なです。私的所有制とは、まさに環境問題を解決するために導入された制度だと言っています。

5 『かつて人類は誰のものでもない草原で自由に家畜を放牧してました。家畜を一頭増やせば、それだけ多く肉や皮やミルクがとれます。草原は誰のものでもないで、家畜が食べる牧草はタダです。6 確かに一頭増えれば他の家畜が食べる牧草が減り、その発育に影響しますが、自由に放牧されている家畜の中で自分の家畜が占める割合は微々たるものです。それゆえ、人々は草原に牧草がある限り、自分の家畜を増やしていくことになりました。7 その結果、牧草は次第に枯渇し、いつの日か無数の痩せこけた家畜がわずかに残された牧草を求めて争い合う事態が到来することになると言うのです。』

8 これこそ「元祖」環境問題です。そして経済学者は、それは、自然のままの草原が誰の所有でもない共有地であるがゆえの悲劇であると主張します。9 環境問題とは「共有地の悲劇」だと言うのです。

『事実もし草原が分割され、その一画を牧場として所有するようになると、その中の家畜はすべて「自分の」家畜となります。0

その時さらに一頭飼うかどうかは、その一頭が新たに牧草を食べることによつて、牧場内の他の家畜の発育がどれだけ影響を受けるかを勘案して決めるようになるはずですが。もはや牧草はタダではありません。他人に牧場を貸したり売ったりする時でも、その中の牧草の価値に応じた賃料や価格を請求するようになるはずですが。牧草は合理的に管理され、共有地の悲劇から救われることになりました。私的所有制の下での自己利益の追求こそが環境破壊を防止することになると言うわけですが。』

「悪魔」の一員だけあつて、経済学者の論理は完璧です（私自身この論理を三十年間教えてきました）。実際、一九九七年の地球温暖化防止に関する京都議定書は、この論理を取り入れました。先進諸国に温暖化ガスの排出枠を権利として割り当て、その過不足を売買することを条件付きで許したのです。

ここでは温暖化ガスが汚染する大気は家畜が食べ荒らす牧草に対応し、各国が売買しうる排出枠は牧畜家が所有する牧場に対応しています。すなわち、それは大気という自然環境に一種の所有権を設定することによつて、それが共有地である限り進行していく温暖化という悲劇を解決しようとしているのです。

では、これで環境問題はすべてめでたく解決するのでしょうか？ 答えは「否」です。わが人類は不幸にも、経済学者の論理が作動しない共有地を抱えているのです。それは「未来世代」の環境です。

（岩井克人「未来世代への責任——経済学の「論理」と環境問題の「倫理」——」による）



子どもというものは、なにやら得体の知れぬようなところがある。そのなすことのひとつひとつに、どのような意味があるのか、おとなは解釈した意味をつけて理解しようとはするのだが、彼らの世界はたしてその解釈された意味で理解できるものかどうか、はなはだ覚束ない。

それでも、そこに子どもの世界がある。それはおとなになつてしまった目から、もはや見ることもかなわぬものかもしれない。そしてやがて、子どもはおとなになつて、解釈され理解される姿になつてしまふ。

学校へ行くようになると、解釈され理解されることがらを学ぶようになる。それは避けられないことだ。

しかし、たいていのおとなが、学校で記憶した知識、学校で獲得した技能を、学校を卒業するとともに忘れていく。これも考えようによつては奇妙なことである。学校では、暗記や訓練が強制され、その結果を点検されるのだが、そのほとんどは忘れられ失われてしまふ。まるで、失うために学校に行つたみたいだ。

それでは、学校は無意味であつたか。失われたあとに残るものがあつたはずである。それはおそらく、彼の心のなかの世界が、深く耕されたことであろう。一時的に獲得した知識や技能以上に、その彼の心の世界こそが、彼にとつての本物かもしれない。

こうした知識の体系を科学と呼び、技能の体系を技術と名づけるなら、人間の文化が科学と技術なしに成立しないことは確実である。しかしながら、実際にそうした科学や技術の体系に身をよせて暮らしていてさえ、これらの知識や技能はむなし、そんな気のすることがある。

科学者や技術者は、しばしば自分の知識や技術をこえねばならぬ局面に出あふものだ。自分の知識や技術を捨てて、自分の心のなかの世界だけにたよるしかない、そうした場面が訪れる。創造はそこにしかない。

念のために言うと、ここで知識や技能が無価値であつたわけではない。理屈の上では、知識は書物に書きとめておけばよく、技能は方法として与えられるだけですむ。しかし人間は、すべての知識が頭の外部にあり、すべての方法が体の外部にあつたのでは、それを心にとけこますることができない。一時的であろうとも、知識を頭に

とどめ、技能を体に通すことによってだけ、心のなかの世界は活性を持つ。

ただし、本来のものは、知識や技能よりは、その心のなかの世界だろう。この点では、暗記を強制し技能を訓練することが、学校では、あるいは人間の成長のためには、過大なような気がする。学校の教師も、家庭の親でさえも、暗記と訓練をしたがるが、考えてみればこれは、教育の文化的性格から遠い。そこでは、叱咤激励する以上のことはない。そして、暗記したらおぼえるとか、訓練すればミスが少なく早くできるとか、当面の効果だけは目に見える。目に見えることはテストになじみやすいので、それがテストの点数になつたりもする。

しかし、本来の身につくものは、そうした知識を忘れて技能が失われたあとでも、なお残っているものだろう。それは、生活者としての立場であつても、科学者や技術者としての立場であつてもそうだ。

（森毅『おかあさんの部屋』より）



わたしのところに、ときどき外国人の建築家がたずねてくる。そのおり「せっかく京都にきたのだから」と、どこかに案内しなければならぬことがしばしばおきるが、そういうときは、桜のころなら夜の平安神宮に、紅葉のころなら夕暮の円通寺に案内することになっている。

平安神宮の西神苑の白虎池や東神苑の栖鳳池のまわりの桜がさくときは、それらが池にうつりこんでそれこそ圧巻だ。たいていの外国人は肝をつぶす。

いっぽう京都の北、幡枝にある秋の円通寺は紅葉がうつくしい。しかしそのボリュウムは平安神宮の桜の何百分の一にもおよばない。

ところがここには、もう一つべつのものがある。比叡山だ。円通寺の東をむいた客殿の縁にすわると、庭の真正面の深紅の紅葉のあいだから比叡山が聳然と姿をあらわす。とりわけ秋の夕暮は西日にはえていっそう美しい。それをみたほとんどの外国人建築家は、呆然として声もでない。

円通寺の庭は「借景庭園」としてしられる。

けつして大きい庭ではないが、庭一面が苔、石でおおわれ、紅葉の木立があり、生垣のむこうには竹藪や灌木がおいしげつていて、さらにそのさきに比叡山がみえる。つまり庭の景物だけでなしに外部世界の風物をもとりいれて一場の眺めとしている。

もちろんヨーロッパにだって客殿からのすばらしい眺めなどはいっぱいある。しかしそれらはたいてい一望千里のパノラミックな景

観だ。円通寺のように生垣や紅葉をはじめとする木立に切りとられて絵のようにみせる、というようなものをほとんどしらない。

というのも、ヨーロッパ人はいっばんに樹木にたいする関心がうすいからだろう。明治に日本にきて、古きよき日本文化を再発見したラファディオ・ハーンも日本の木立の美しさを絶賛し「それは日本人が木々を愛しているからだ」という（『神々の国の首都』）。

たしかに欧米人の植物にたいする関心のほとんどは花である。樹木のたたずまいや生垣・刈込のデザインなどといったものにはあまり興味をしめさない。

さらにヨーロッパには山というものがすくないから、山もあまり関心をひかない。

したがって「庭内の樹林と庭外の山などをあわせて一幅の絵にする」というような発想はなかなかおきてこないのである。

その結果、ここに庭の構成要素のなかの「垣」というものにたいする東西の認識の差があらわれてくる。

というのは、ヨーロッパの庭の垣や塀は、たいてい外の世界と内の世界とを断絶する「壁」でしかない。垣のなかには鉄柵というものもあるが、それらはよいいにのりこえられないように高くしてあるか、あるいはしばしば鋭い剣先が天をむいて見る人をドキリとさせる。

ところが日本では、しばしば灌木で生垣をつくるだけでなく、塀なども板塀やブロック塀などでなく築地塀のようにりっぱにしている。とくに借景庭園のばあいには庭の内と外の景観をつないで一つの風景にする、という大切な役割をもたせ、それによって庭の狭さなどの解消にも役だたせている。つまり「借景垣」だ。

したがって垣や塀は日本の庭づくりにおいては景観の一部を構成するもので、たいへん重要なものである。江戸後期の俳人の小林一茶（一七六三―一八二七）もそういう美を見逃さなかった。冬枯れや垣に結びこむ筑波山

（上田篤『庭と日本人』）



周知のようにギリシア・ローマ神話では、ゼウスもヘラも、またアポロやアフロディテ、そしてキューピッドも、それぞれ年齢に応じた肉体をもち、顔をもっている。すなわち女神（ヘラ）、老年神（ゼウス）、青年神（アポロ）、童子神（キューピッド）といったように、かれらは性差や肉体の特徴に即して行動し、その個性的な表情が彫刻や絵画で表現された。そのみではない。それらの想像上の神々は天空に輝く星の群にさえ投影されたのである。同じことは、ヒンドウー教の神々の場合でもいえるだろう。ヒンドウー・パンテオンの三大主神といわれるヴィシュヌ神・シヴァ神・ブラフマ神はいまでもない。かれらの配偶女神や眷属神を含めて多彩な神像群が創造され、そのいずれもが変化に富む個性と表情をそなえているのである。かれらはいずれも肉体を付与されているがゆえに、受肉の神々ということができるだろう。受肉（インカーネーション）というのは人間の姿をとってあらわれること、すなわち化身・権化のことをいう。キリスト教では、イエス・キリストが神の子として顕現したことを指す。同じようにヒンドウー教でも、さきのヴィシュヌ神が人間や動物に姿を変えてあらわれるという、化身（アヴァターラ）の考え方があった。ギリシア神話もヒンドウー教神話も、その多神教の基礎に神々の受肉インカーネーションという観念がはたらいていた点で、同血の神話体系を構成していたということができるのである。ところがこれにたいして、わが国の神々の形成には、このインカーネーションの契機がはじめから欠けていた。そもそも、神々の姿を人間の身体によって表現しようとする論理を育てることをしなかった。というのも神はまず第一義的には神霊としてとらえられ、空間を浮遊・移動して、森や山や樹木に憑着するものと信じられたからである。古い起源を有する神々の名称に、飛鳥に坐す神とか熊野に坐す神といった例が多くでてくるが、これは神が姿を隠して特定の土地や場所に憑着し憑依している状態をあらわしているのである。神は目に見えない神霊としてとらえられているから、その行動は

自在である。すなわち神霊は無限に分割されて空間を移動し、各地に鎮座することができる。たとえば全国の津々浦々に分布する八幡神は、もとはといえば大分県の総本家である宇佐八幡の神霊が分割され、空間を移動して、それぞれ憑着したものであった。それを鎮座といたのである。このような日本の神々の性格は、さきのギリシアやインドにおける場合が受肉インカーネーションであるとするならば、憑依インカーネーションの機能として特徴づけることができると思う。ポゼッションとは、神が依り憑くという意味である。それは、目に見えない神霊の行動様式をあらわしている。日本の神々は本来、その肉体性や個性を表立ってことあげしない存在として伝承されてきた。われわれは記紀神話において、イザナギ、イザナミや、アマテラス、スサノオをはじめとして、かれらがいかなる個性をもち肉体をそなえているかについての情報を、ほとんど与えられてはいない。また、神社に祀られている個々の祭神を呼ぶ場合、たとえば一宮、二宮、三宮……といった、その固有名詞をいわないですますことが多い。たとえば春日大社のように、きちんとした神々の名称があるにもかかわらず、そこに祀られている五柱の神々を一殿、二殿、三殿、四殿、五殿といひならわしてきた。同様に伏見稲荷の場合も上社、中社、下社といい、伊勢神宮は内宮、外宮で用を足してきたのである。このようなことが生じたのは、わが国の神々の世界には、もともとギリシアやインドの多神教のように、受肉の観念がなかったからである。私は思う。自然の背後に身を隠して鎮座する神々の生息は、目に見える多神教とは水準を異にする性格のものであった。あえていえばそこには、受肉を拒否する憑依の観念がはたらいていたといっているのである。その憑依の観念によって構造化されていたわが国の神々には、その肉体が薄明の彼方に隠れていたように顔がなかった。表情が喪われていたのである。

（山折哲雄『日本人の顔 図像から文化を読む』より）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

マインド・コントロール概念の導入は、カルト問題の現場に大きな変化をもたらした。なぜ人がカルトに入信するかを説明する、明確な道具ができたからである。それまでは、これらは親子関係や教育問題などから言及されてきた。マインド・コントロール概念はメンバーが自分に起きた出来事を理解する手立てとなり、家族が状況を理解するために役立つ。これを臨床心理学の言葉に置き換えれば、心理教育ということになるであろう。心理教育とは、症状や行動がどのようなメカニズムで起きているか、それを緩和させたり予防したりするにはどうしたらよいかを教育する介入方法である。この機能は、今後も十分に役立つであろう。

反面、この説明がいつでも有効性を持つわけではないことも事実である。ありがちなのは「自分はマインド・コントロールされていたのではなく、自分で選んだのだ」という主張である。この場合、マインド・コントロール概念は自身のプライドを傷つけるものとして語られる。ここには、自分には十分なコントロール能力があり、その結果、信じたのであって、他人の思うようにコントロールされていたわけではないという反発のニュアンスが含まれる。実際、個々のケースにおいて、個人がどの程度マインド・コントロールと呼ばれるものによって影響下にあったかは、究極的には知る術がない。

HowモードとWhyモード

マインド・コントロールという社会心理学的説明で、すべてが解決されるわけでもない。なぜなら、社会心理学が担えるのは事象の説明や説明であり、当事者が自身の経験をどう受け止めるかという臨床的側面は担っていないからである。「自分がマインド・コントロールされていたことは、よくわかった。でも、それが何になるのか」という言葉を当事者から聞くことは、しばしばある。これは、How（いかに）とWhy（なぜ）の相違である。人の持つ知的欲求として「どうして」を知りたい場合と「なぜ」を知りたい場合とがある。これは対象となる事象によっても異なるであろうし、どちらを知ることが満足につながるかが個人のメンタリティによって異なることもある。カルトがもたらす信念は、元来Whyに重点を置くものである。例えば「なぜ社会には、こんなに悪がはびこっているのか」「なぜ私は、こんなに生き辛いのか」などの疑問や

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

苦悩に答えるところから、これらの信念は魅力を呈する。よって、これらの集団にはWhyに関心を引き寄せられやすい人が残ることになる。

Whyは形而上的な問いであり、そもそも多くの人が納得する正答を用意する性質のものではない。カルト・メンバーに教義論争を吹き掛けて、出口の見えない堂々巡りに陥るのは、このためである。信じるか信じないかの基準しかないものに、客観的な正当性を求めるのはナンセンスである。したがって、カルト的思考を持った個人が別の視点を見出すのは、刑而上的な問いの前提に自ら疑問を持つときか、思考の方向性がHowのモードに切り替わったときのいずれかであろう。そこで個人がHowを理解すれば、それだけで事足りる場合もある。だが、そもそもWhyに関心を持っていた彼らは、原点に戻る場合も少なくない。それは、哲学的・宗教的問いに対する絶対的な答えを失い、果然と立ちすくむWhyであることも、過去の個人的経験に対するWhyであることもあるであろう。

（戸田京子「カルト問題における心理学——社会心理学から見えるもの・臨床心理学から見えるもの」による）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ハラは、単なるムラを取り囲む、漠然とした自然環境のひろがり、あるいはムラに居住する縄文人が目にする単なる景観ではない。定住的なムラ生活の日常的な行動圏、生活圏として自ずから限定された空間である。世界各地の自然民族の事例によれば、半径約五、一〇キロメートルの面積という見当である。ムラの定住生活以前の六〇〇万年以上の長きにわたる遊動的な生活の広範な行動圏と比べれば、ごく狭く限定され、固定的である。いわばムラを出て、日帰りか、長びいてもせいぜい一、二泊でイエに帰ることができる程度ということになる。

つまり、ハラはムラの周囲の、限定的な狭い空間で、しかも固定的であるが故に、ムラの住人との関係はより強く定着する。

ハラこそは、活動エネルギー源としての食料庫であり、必要とする道具のさまざまな資材庫である。狭く限定されたハラは資源を効果的に使用するために、工夫を凝らし、知恵を働かせながら関係を深めてゆく。こうして多種多様な食料資源の開発を推進する「縄文姿勢」を可能として、食料事情を安定に導いた。幾度となく、ハラの中を動き回りながら、石鏃や石斧などの石器作り用の石材を発見したり、弓矢や石斧の柄や木製容器用の、より適当な樹種を選び出したりして、大いに効果を促進した。

縄文人による、ハラが内包する自然資源の開発は、生態学的な調和を崩すことなく、あくまで共存共栄の趣旨に沿うものであった。食物の味わい一つとっても、我々現代人と同様に好き嫌いがあつたに相違ないのに、多種多様な利用を旨としたのは、グルメの舌が命ずる少数の種類に集中して枯渇を招く事態を回避する戦略に適うものであった。これは高邁な自然保護的思想に基づく思いやりというのではない。好みの食物を絶滅に追い込むことなく連鎖によって次々と他の種類に波及して、やがて食料だけでなく、ひいては自然を危うくするという事態を避けることにつながる。多種多様な利

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

用によって、巧まずしてこのことが哲学に昇華して、カミの与えてくれた自然の恵みを有り難く頂戴させていたという「縄文姿勢方針」の思想的根柢になったとみてよい。ハラそのものを食料庫とする縄文人の知恵であり、アメリカ大陸の先住民の語り口にも同様な事情を窺い知ることができる。

同じ人類史第二段階でも、西アジア文明に連なるヨーロッパにおいて、ハラの主體性を認めず、農地拡大の対象と見なす思想とは対立的である。つまりこのことも、一万年以上に及ぶ長期にわたる縄文の歴史に根差す日本的心における自然との共存共生の思想に対して、土地を利用し、ひいては自然を征服するというような思想に根差すヨーロッパ近代以降の合理主義の発達との、際立った対照につながっているのではなからうか。

ハラを舞台として、縄文人と自然とが共存共生の絆を強めてゆくのは、自然資源利用の戦略のレベルにとどまるのではない。利用したり、利用されたりという現実的な関係を越えて、思想の次元にまで止揚されたのである。一万五〇〇〇年前に始まり、一万年以上を越える縄文の長い歴史を通じて培われ、現代日本人の自然観を形成する中核となった。

(小林達雄の文章による)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

カウンセリングにおいてなにより肝要だとされるのは、相手の言葉をなんの留保もなしに受けとること、まちがっていると思っても反論せずにいったんは言葉をそれとして受けとめることである。そのため多くのカウンセラーは、相手の言葉を確かめるように一言一句反芻する、そのような訓練を受ける。傾聴ボランティアのトレーニングでは、言葉がぱったり途絶え、事態が塞いできたときには、「いま、何考えていました？」と訊き返せばよいと教えられる。がもし、カウンセリングや傾聴がこのように進められるのだとすれば、それは逸らし、でしかない。ここでは、問題が、つまり自他のあいだで生じている齟齬が、それをわたしがどう受けとめるかという、わたしの側の問題に密かに転位されるからだ。問題を生じさせているまさにその原因である事態について問うべきことが、その事態をどう受けとめるかという当事者の「内面」への問いにすり替えられるのである。

カウンセリングや傾聴もまた「待つ」を事とする。言葉を迎えるにゆくのではない。言葉が、不意にしたたり落ちるのを、ひたすら待つのである。

しつこく言うが、言葉を迎えるにゆくのではない。言葉を迎えるにゆくのは、「聴く」のおそらくは最悪のかたちである。

I 三月ごろに人から「もう落ちつかれたでしょう」と言われたことがあったんですが、それになんとも言えないギャップを感じました。震災から二ヶ月後くらいですが、私にとつての時間と、その人にとつての時間は、また意味が違うんですね。

K 日本人はあいさつのときにそういう言い方をする人が多いですね。それで「はい」と言われると、自分も安心できるから。そうすると、そう言われたほうもうるさいから、たいてい「はい」と答えるんですよ。

I 私も言いました。(笑)

K そこでギャップができて、あとの会話が続かないね。

I もうその人には話さんでおこうと思いました。

K そうでしょう？ 心のケアとかなんとか言っている人にも、そういう失敗をする人がすごく多い。「どうですか、もうそろ

そろ」なんて言われると、立ちなならないかんみたいな格好になってくるから、よけいに苦しめる結果になるんです。

I さすがプロだなど思いましたが、なんにも言わずに聞いてくれた人がいましたね。なんにも言わずに聞いてくれることがこんなに大事なのかと、身にしみて感じましたから。

K へたに慰めたりもしない。はじめから元気づけられたつてどうしようもないもの。

(河合隼雄『心理療法の現場から(上)』、石川敬子との対談の章より)

聴くということがだれかの言葉を受けとめることであるとするならば、聴くというのは待つことである。話す側からすればそれは、何を言っても受け容れてもらえる、留保をつけずに言葉を受けとめてくれる、そういう、じぶんがそのまま受け容れてもらえるという感触のことである。とすれば、「聴く」とは、どういうかたちで言葉がこぼれ落ちてくるのか予測不可能な「他」の訪れを待つということであろう。

(鷺田清一『「待つ」ということ』)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

子どものころ、私は八月六日を息をひそめてすごしていた。一日がすぎるのを、ただじつと部屋の片隅にすわって待っていた。広島は八月六日は、朝八時から平和記念式典に始まり、八時十五分の黙禱、そして夜の灯籠流しで終わる。広島市の中心、平和公園と原爆ドームの間に元安川という川がある。その川面に、水を求めて亡くなった犠牲者を吊る灯籠が流されるのだ。

私はその灯籠流しが好きだった。当時は元安川近くの社宅アパートに住んでいたの、夜はよく一人で灯籠を見に行っていた。慰霊のためではない。橋の上から、ゆらゆら海へ流れでいく光をながめながら、私は安堵のため息をついていたのだ。これでやっと今年も八月六日が終わる、と。

私は八月六日がいやだった。吐き気がするほどいやだった。「ヒロシマの声を全世界に!」「広島は喪に服しています」と連呼する、したり顔の識者や記者やアナウンサーたちがいやだった。——その「ヒロシマ」っていったい誰のことなんだよ?

子どもだから、明確に言葉にできていたわけではない。けれども、そう叫びたくなる息苦しさは、八月六日がくるたびに、私の身体のかを通り過ぎていった。

おかげで、平和教育には完全に落ちこぼれてしまった。

教師うけの話ではない。教師うけなら、ばっちりにはほど遠いが、そこそこの評価は得ていたと思う。小学生も五、六年になれば、一応の手練手管は身につけている。平和教育のために作文を書かされたりするが、それももうほとんどマニュアル化されていた。おとうさんやおばあさんや近所のおばさんから聞いた「八月六日の話」をならべ

て、その後に「原爆はほんとに悲惨だと思っています。戦争は絶対にしてはいけないと思います」と、つけくわえればOKだ。

あとは「話」がどれだけリアルかで、教師うけの良し悪しは決まる。リアルであればあるほど、よい作文にされる。あえていえば、実話である必要すらない。

(中略)

私の経験がすべてだというつもりは毛頭ない。もっと真面目な平和教育、もっと真剣な小学生もたくさんいただろう。けれども、私

の経験もまた平和教育の一つの姿である。「原爆はほんとに悲惨だと思いません。戦争は絶対にしてはいけないと思いました」という結論以外は許されなかった。そのなかで自由をもとめるとすれば、息苦しさを感じるすべし、オーバーな作り話にして全体を茶化すしかないだろう。

検閲は笑い話を生む。旧ソ連圏の社会主義国でもそうであったし、戦後の広島市でもそうであった。

「平和教育は虚妄だった」といいたくないわけではない。この種の裏話をもつてきて、戦後の思想を貶める言説には私自身あきあきしている。戦後の思想が抑圧なら、一個の裏話をもつてきて、戦後の思想を根こそぎひっくり返そうとするのも抑圧にほかならない。戦後批判の言説の多くは、救いがたいくらい戦後的である。

原爆は悲惨だ。どうしようもないくらい悲惨だ。広島で育った人間ならその記録は必ず目にするし、記録できた出来事は最も悲惨な出来事ではない。それを忘れたつもりはない。私がいいたいのはただ一つ。その絶対的な悲惨をもつてしても、戦争と平和の意味のすべてを覆いつくすことはできない、ということだけだ。

(佐藤俊樹『〇〇年代の格差ゲーム』)



「私が結婚相手に望む経済力は、そんなに大きなものではありません。ただ私と子ども二人が安心して暮らせる程度でいいのです。子どもには小さいときから習い事をさせてやりたいです。お金がないからといって子どもにみじめな思いをさせるのだけは絶対にいやです。そして、子ども二人を私立大学に行かせてやれるくらいの給料は求めます（だって、私もそうしてもらったので当然だと思います）。月に一回は外食し（もちろん廻るお寿司ではなく、お洒落なイタリアンとかです）、年に一回は海外旅行に行く。そういう程度の経済力です。私には玉の輿願望はありません。私の両親が夫の両親に対し、肩身のは狭い思いをするのはいやなので、軽い玉の輿程度で十分です。もちろん夫は真面目に働く人でないと困ります。ちよつといやなことがあると会社を辞めるとかされたりすると、とても困ります。それから、土曜日には子どもを連れて公園でサッカーしたり、川の堤防の下でキャッチボールしたりするのを、私は堤防の草むらに坐って眺めるのが夢です。それから、煙草を吸う人は絶対にお断りです。本人よりも周りにいる私や子どもたちの受動喫煙が怖いからです。家族（子どもと私の両親）を大事にして、結婚記念日とかは絶対に覚えていてくれないといやです。あとDVとかして、暴力を振るう人ももちろんお断りです。まだ、他にもありますが、先生が三つまでと言われたので、このくらいにしておきます」

言っておくが、これは学生の書いたものを合成したり、特定の個人のものを用意的に抽出したりしたものではない。みんなみんな、こう書いてくるのである。なんでここまで同じなのか、私が聞きたいくらいである。この女子学生の結婚願望を男子学生に紹介すると、教室中に「冬虫夏草」みたいな菌糸状のものが浮遊する。漠然とした怒りと不安めいたものだ。

こういう、学生の書いたものを何年も多数読んできて、私はこの国の晩婚化は止まらないと思つたのである。今は、まだ晩婚化で済んでいるが、これから非婚率の上昇も必至である。就職難と結婚難が、双子になってやってくる。

男の子は、正社員として就職できずにフリーターになれば結婚で

きない。結婚できないで家庭を持てないから、就労意欲が低下し、ますます離職が促進される。女の子は、正社員で就労意欲の高い、ついでに給料も高い男性目指して、「容貌偏差値」を上げるのに余念がない。しかし、「実用偏差値」はきわめて低い。料理を作ったことがない。ご飯を炊いたことがないという女子は多い。なぜなら、女子学生の母親は「女は、結婚するといやでも家事をしなければいけないから、家にいるうちはそんな苦勞をさせたくない」と、娘に家事をさせないからである。むしろ、男子学生の母親の方に「将来、息子が結婚したら、奥さんも働いている可能性が高いので、男も家事ができなければならぬので、今から教えている」と語るケースが多かった。だから、男の子の方が、基本的な炊事はできるのである。現在、大学生はとても忙しい。授業以外に専門学校に行き、アルバイトもしている。

「バイトで深夜の十二時にアパートに帰り、カップ麺を食べていると侘しくなり、就職してもこういう生活かと思うと、家に帰ったときにはやはり誰か人の気配があつてほしいなと思います」

こういうことを女子学生が書いてきたケースは一回もない。男子学生にのみ見られる。こういう生活実感から来る結婚への憧れは、だからこそディテールに凝った具体的なものになるのである。

（小倉千加子『結婚の条件』）



読解問題 4月4週分

問1 読解マラソン集1番「国境を越えて移動する人々にとって」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A フランスからアルジェリアに移民で向かう人たちは、文化の連続性を感じている。
B トルコからドイツに移民する人たちは、ドイツ語ができないことをあまり気にしない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「国境を越えて移動する人々にとって」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A アルジェリアからの移民がフランス語が使えるという場合、それは日常会話レベルでしかないことも多い。
B 日本に出稼ぎに来る人は、日本語の学習に熱心であることが多い。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「過去には、二種類のものが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 歴史には、年表に書かれているようなものもあるし、現在に受け継がれているものもある。
B 歴史哲学が歴史に比べて論議されることが少ないのは、人々が過去を受け継がなくなっているからである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「過去には、二種類のものが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 近代以前の社会では、人々は狭い共同体の中で暮らしていたので、広い世界とは結びついていなかった。
B 共同体の中で生きるとき、人間は、歴史を過去の知識として感じるようになる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「ここで一つの例をあげる」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 高校時代に習った数学の知識は、本人が忘れてるように見えても、記憶の中に蓄積されている。
B 脳に蓄積された知識の中には、容易に取り出せるものと永遠に取り出せないものがある。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「ここで一つの例をあげる」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 優れたコンピュータは、映画の一つ一つのコマを連続したものとして見るができる
B 人間は、連想によって、異なるものの間に共通点を見出すことができる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「経済学の父アダム・スミスは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A アダム・スミスの「見えざる手」とは、全体の利益の増進が、個人の利益に結びつく市場機構のことである。
B 「共有地の悲劇」を解消するためには、個人の自由をある程度抑制しなければならない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「経済学の父アダム・スミスは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 温暖化ガスの排出枠を権利として各国に割り当てることは、大気に所有権を設定することであった。
B 未来の世代は、環境について、自己の利益を追求することができない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 5月4週分

問1 読解マラソン集5番「子どもというものは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 大人になっても、解釈され理解される姿にならない子供がいる。

B 学校で、暗記や訓練が強制されると、かえってその結果のほとんどは忘れられてしまう。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「子どもというものは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 自分の持っている知識や技能を超えたところに、科学者や技術者の創造がある。

B 知識は外部にあればいつでも使えるのだから、頭の中にとどめておく必要はない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「わたしのところに、ときどき」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 外国人の建築家を紅葉のころの円通寺に案内すると、その紅葉の美しさに声も出ないほど驚く。

B 円通寺の裏山は、そのまま紅葉の比叡山に続いている。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「わたしのところに、ときどき」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ヨーロッパは樹木が少ないから、植物に対する関心のほとんどは花である。

B ヨーロッパの垣は、外と内を隔てているが、日本の垣は、外と内を結びつけている。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「周知のようにギリシア・ローマ神話では」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ギリシア・ローマ神話の神々が個性的であるように、ヨーロッパ人は個性を大切にしてきた。

B 日本の神々は姿を隠して、それぞれの土地や場所に憑依している。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「周知のようにギリシア・ローマ神話では」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本の神々は見えない神霊だから、全国津々浦々に分布できる。

B 日本の神々は、肉体の情報希薄であるとともに、固有名詞さえも省略されることがある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「マインド・コントロール概念の導入は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A かつては、カルトの問題は、親子関係や教育問題などから言及されることが多かった。

B マインド・コントロールされていた人が、それを自分自身で選んだのだと主張することがある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「マインド・コントロール概念の導入は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A カルトの信念に魅力を感じるのは、Whyに関心を持つ人が多い。

B Whyをつきつめることによって、Howに進むことができる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 6月4週分

問1 読解マラソン集9番「ハラは、単なるムラを取り囲む」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 縄文人にとって、ハラは、ムラという日常的な生活圏を離れた自然環境の広がりであった。
B 縄文人にとって、ハラは、食料調達以外の自然資源を利用する場でもあった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「ハラは、単なるムラを取り囲む」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ヨーロッパ文明は、自然との共生よりも、自然を征服するという発想を持っていた。
B 縄文人はグルメだったので、多種多様な食物を利用した。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「カウンセリングにおいて」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A カウンセリングで言葉が途絶えたとき、「いま、何を考えていました？」と聞くのは、言葉を迎えにいくことである。
B カウンセリングで大事なことは、相手の言っていることがまちがいでないかぎり、すべてを受け止めることである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「カウンセリングにおいて」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A カウンセリングのプロは、慰めたり、元気づけたりすることが自然にできる。
B 聴くというのは、相手の言いたいことを予測して、じっと待つことである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「子どものころ、私は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私が、犠牲者を吊う灯籠流しが好きだったのは、それで八月六日が終わるという安堵からだった。
B 私は、平和教育の作文なら、そこそこのうまく書くことができた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「子どものころ、私は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 平和教育は、原爆の悲惨さや平和の大切さを確認することで達成できる。
B 戦後の平和教育が虚妄だったという自覚が平和教育の出発点になる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「私が結婚相手に臨む経済力は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 女子学生の結婚願望と男子学生の実態の間にはギャップがある。
B 日本の晩婚化と非婚率の上昇が止まらないのは、女性が自立し始めたからである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「私が結婚相手に臨む経済力は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 女の子の多くは、料理を作るような実用的な能力は低い、容貌をよくすることには余念がない。
B 男子学生の結婚への憧れは、女子学生とは違い生活実感を伴っている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

4～6月

小1 コード: nane ス:	小2 コード: nane ス:	小3 コード: nane ス:
小4 コード: nane ス:	小5 コード: nane ス:	小6 コード: nane ス:
中1 コード: nane ス:	中2 コード: nane ス:	中3 コード: nane ス:
高1 コード: nane ス:	高2 コード: nane ス:	高3 コード: nane ス:

1～3月

小1 コード: nane ス: PDF	小2 コード: nane ス: PDF	小3 コード: nane ス: PDF
小4 コード: nane ス: PDF	小5 コード: nane ス: PDF	小6 コード: nane ス: PDF
中1 コード: nane パス	中2 コード: nane パス	中3 コード: nane パス

ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF
高1 コード： nane パ	高2 コード： nane パ	高3 コード： nane パ
ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF